

Ⅲ： 東京女子医科大学母子総合医療センターの臨床成績

1. 総説として

ほぼゼロからスタートした母子総合医療センターであったが、そのチームワークの評価が如実に現れる超低出生児の成績において、開設初年より 80%以上の生存率であった。その 3 年間の成績を発表した時に、他の施設が 50-60%であったところから、beginner's luck でありその高成績がいつまで続くか、といわれるほどであった。勿論他の施設の成績も良くなり、2000 年代になって東京女子医科大学の成績はもう特別でなくなったが、みんなの目標とされ、それが日本全体の成績を向上させる刺激となったことを誇りに思っている。別項に仁志田が 2007 年に周産期新生児医学会を行った際に会長講演としてまとめたスライドを示すので参考にされたい。[*USB 中の臨床成績のスライドをご参照下さい。]

東京女子医科大学には日本の草分けの糖尿病センターがあり、その大森安恵前所長は糖尿病でも母親になれるという哲学で多くの糖尿病母体を管理していたところから、当母子センターは I DM を日本で一番多く経験している。また心臓血圧研究所に全国から先天性心疾患を有する児が集まり治療を受けていたところから心疾患に既往のある妊婦が集まり、腎センターからは多くの腎移植や透析中の妊婦が紹介された。特筆されるのは、60 例を超える腎移植後の母親から生まれた児の予後が、全員生存と正常グループとほぼ変わらない成績であったことである。これらのハイリスク母体胎児の管理は、産科と新生児のチーム医療が不可欠であり、その点で我々の成績は日本のベンチマークとなるものである。

2. 母子センターの臨床成績

<はじめに>

東京女子医科大学に母子総合医療センターが設立された 1984 年 10 月から 2004 年までの 20 年間の入院状況の変遷を検討した。

<対象と方法>

NICU 入院児の診療記録を基に集計を行った。なお、一部の検討では、対象を次の 2 期に分けて行った。

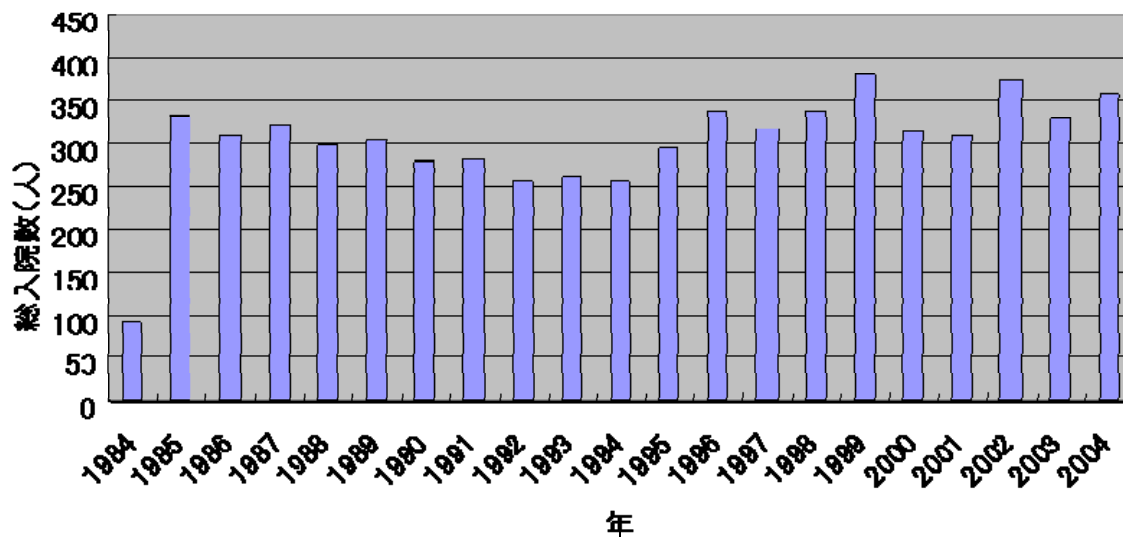
前期：1984 年～1994 年

後期：1995 年～2004 年

<結果>

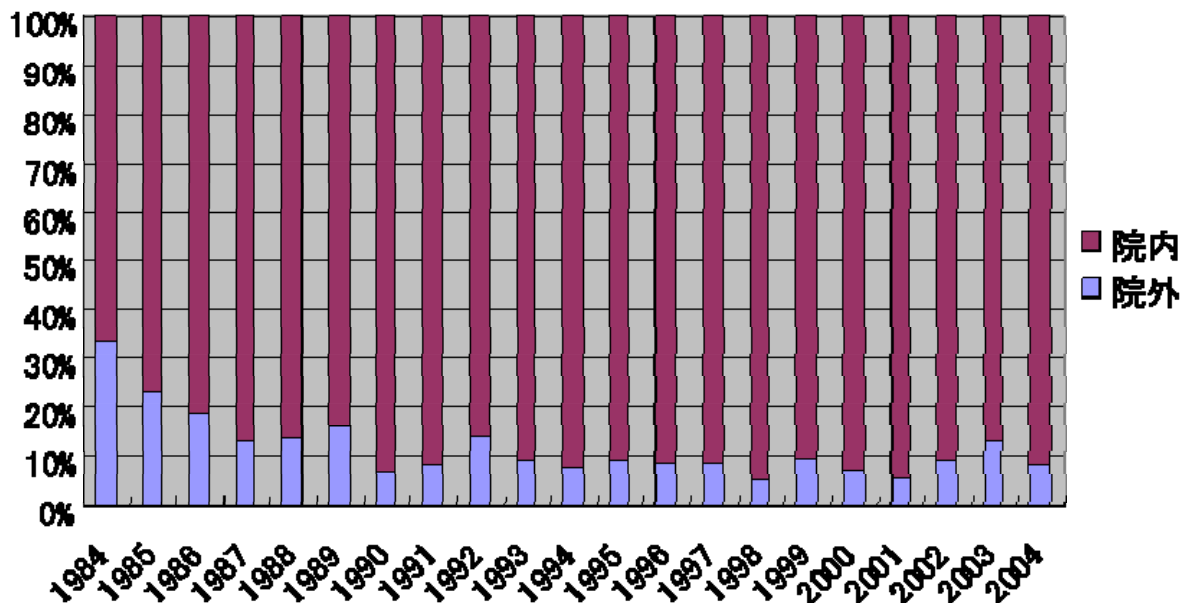
1. 全入院児の検討

1) 20年間の入院数の変遷



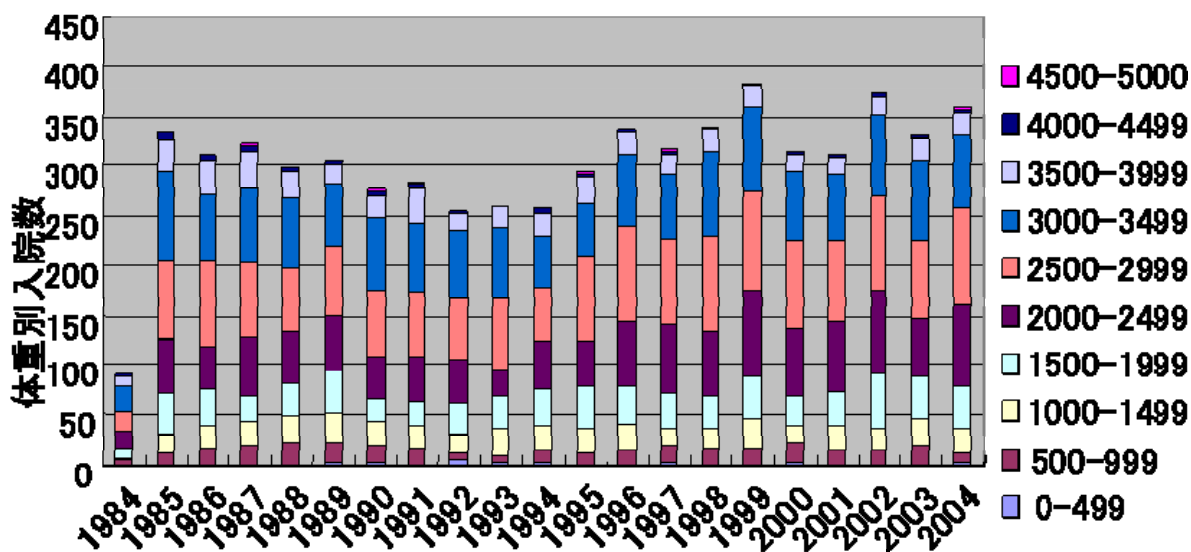
1年間に300～350名のハイリスク新生児が入院となった。

2) 院内・院外出生児の比率



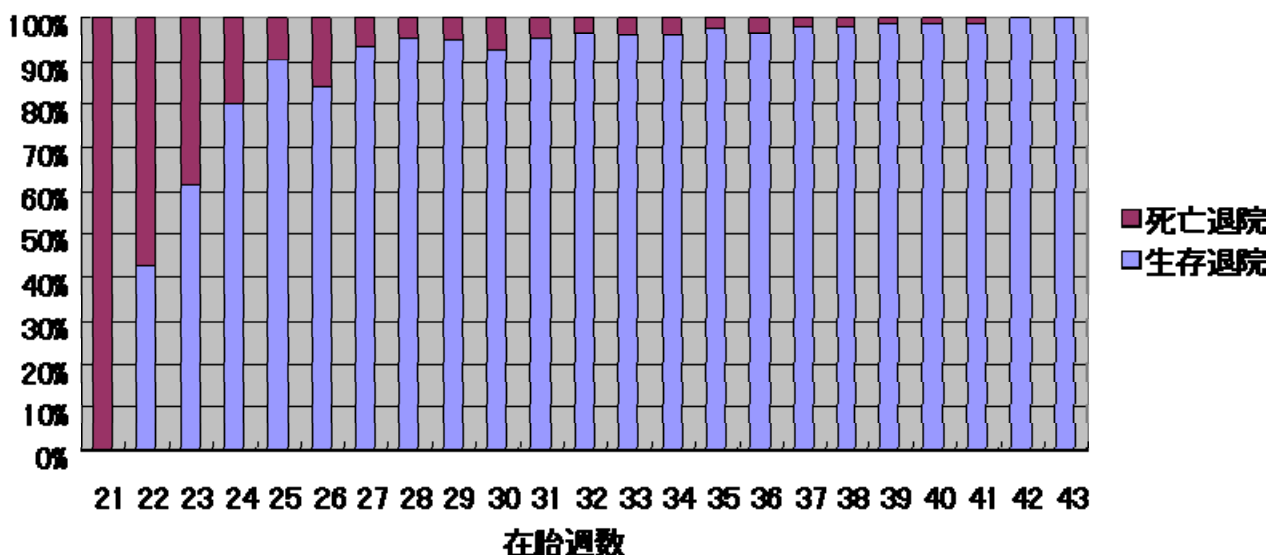
院外出生児の入院数の比率は減少し、1990年代には10%以下となった。

3) 体重別入院数の推移



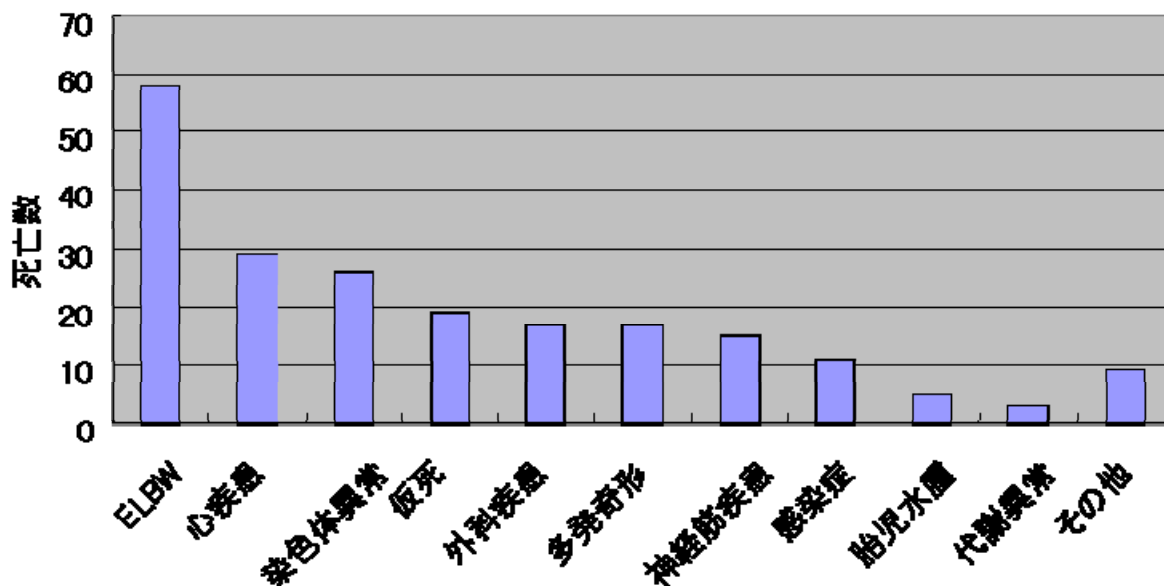
低出生体重児の入院数が増加傾向にある。

4) 在胎期間別の生存率



全入院児の在胎期間別生存率を示す。在胎期間 21 週での生存例は存在しないが、在胎期間 22 週では 40%以上が生存退院しており、世界に誇れる成績である。

5) 死亡原因の解析



全体の死亡原因を検討すると、超低出生体重児がもっとも頻度が高かった。続いて、先天性心疾患、染色体異常が占めていた。次の死亡原因は仮死であった。死亡原因全体としては、すでに死亡を回避できる疾患の占める割合は少なく、超低出生体重児および仮死児の予後の改善が重要であることを示した。

2. 超低出生体重児の予後の検討

超低出生体重児 338 例の予後を検討した。

1) 対象の背景は次の通りである。

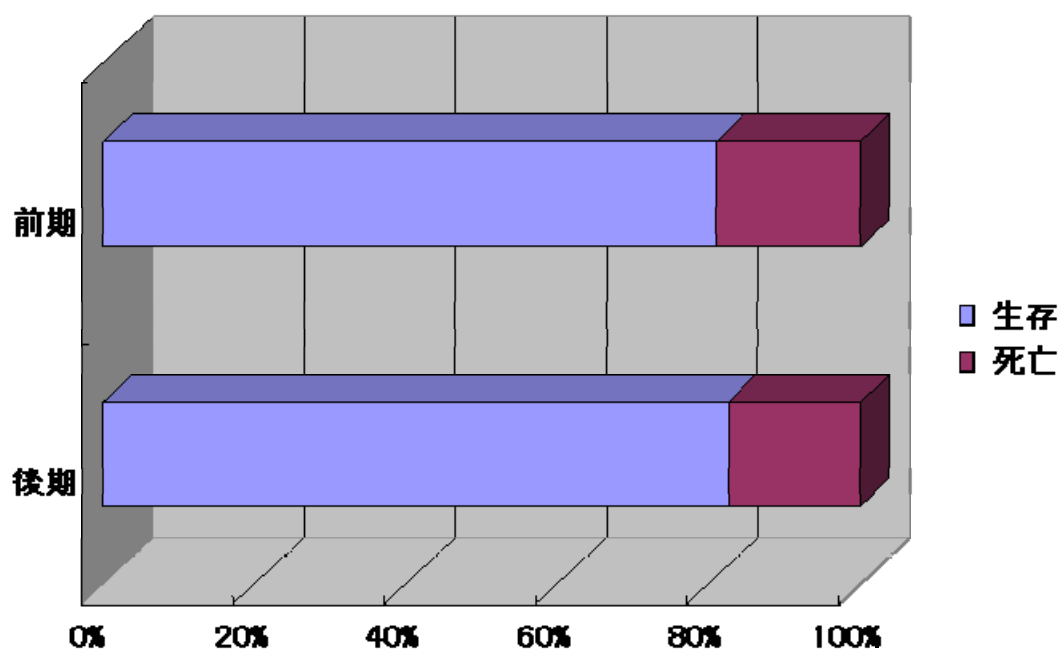
	前期	後期
入院数 (人)	172	166
出生体重 (g)	755±162	745±157
在胎期間 (週)	26.7±2.5	26.5±2.5
Apgar score		
1分	3.9±2.4	6.7±2.1
5分	3.5±2.1	5.9±1.9
入院日数	131±88.6	136.9±120

2) 呼吸管理の変化

	前期	後期
呼吸器管理日数	39.8±39.8	41.9±39.8
呼吸器別管理日数		
CMV	36.9±36.8	26.7±41.8
HFO	3.3±39.8	22.5±27.6
酸素使用日数	58.7±55.0	75.5±63.3

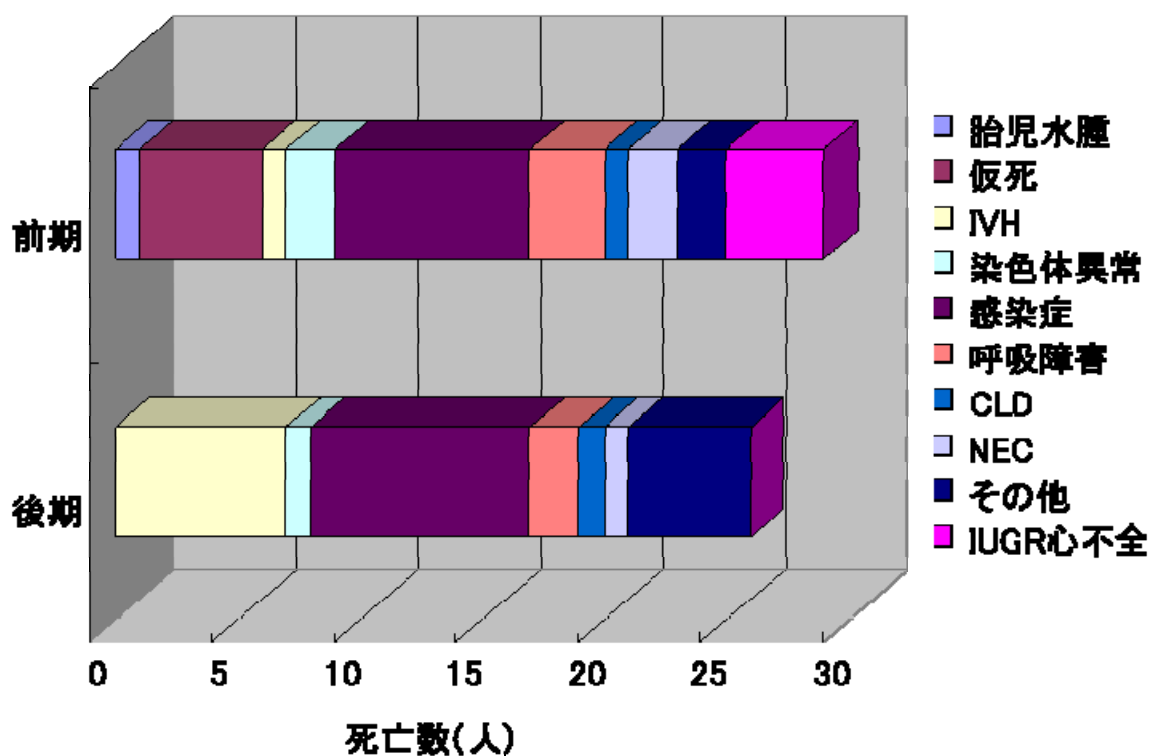
後期ではより HFO を多く使用しているが、呼吸管理日数には特に変化を認めていない。

3) 生存率の変化



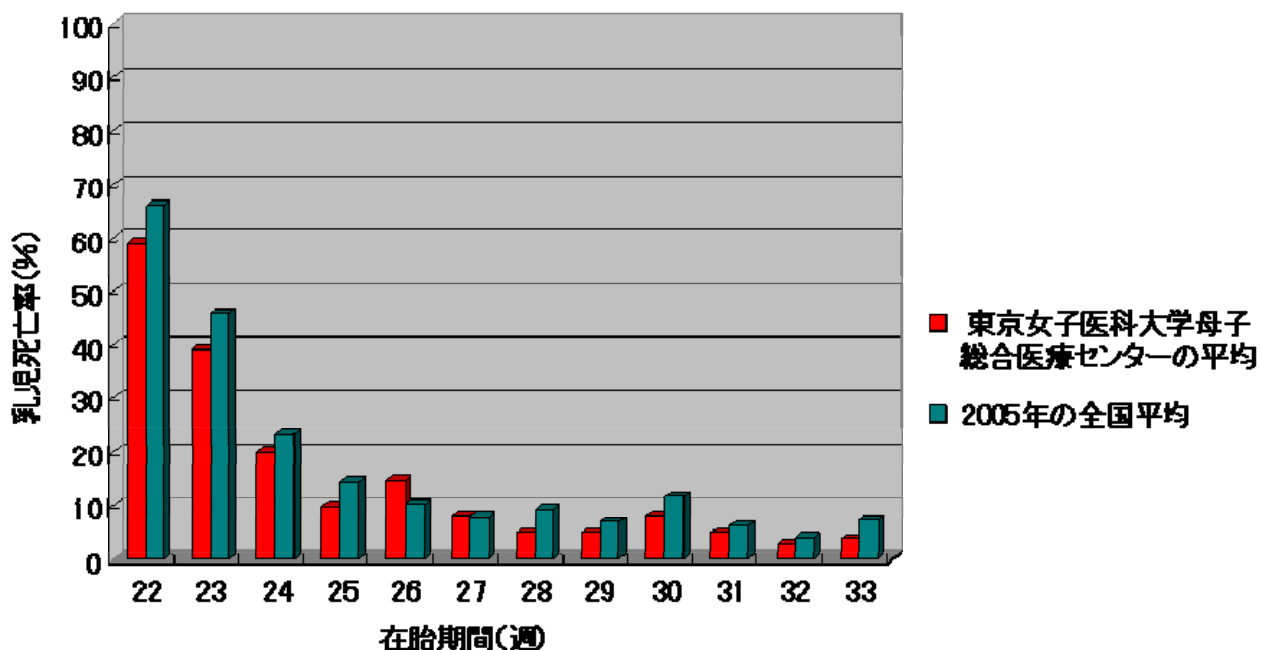
後期で生存率の改善が認められる。

4) 死亡原因の変化



IUGR の心不全による死亡が前期では多く認められたが、後期では殆ど見られなくなった。これは病態に即した治療の進歩の結果と考える。一方、後期では IVH に関連する死亡が多く認められ、今後の課題と思われる。

5) 全国平均との比較



20年間の東京女子医科大学母子総合医療センターの超低出生体重児の平均死亡率を、2005年出生の超低出生体重児の全国の平均死亡率と比較した。2005年の全国平均と比較しても、当センターの死亡率の方が低いことが分かる。したがって、20年前から全国の2005年レベルの医療が提供されていたと言える。

<まとめ>

1. 20年間（1984～1994年）の入院状況の変遷としては、総入院数に変化はないが、院外出生児は減少した。
2. 超低出生体重児の20年間の予後は、2005年出生の全国の超低出生体重児の予後と比べても、良好であった。